

特別公開B

珈琲や かじせん
鍛冶千



奈良町見知りル 2022.11/6sun▶13sun

かつて東大寺正倉院の北側に広がる雑司町には、寺院関係の鍛冶職人や刀工が多数住んでいた。転害門近くにある八鐵神社は、今でも鍛冶や鋳物にかかわる人々の信仰を集めている。

鍛冶千の先祖は、江戸時代には東大寺の錠前や鍵、柱に巻く鉄の帯などを作る鍛冶職人だった。雑司町に住みながら京街道沿いで鍛冶屋を営んでいたが、明治後期になり西田千太郎が現在の今在家町に移り住み工房兼住宅とし、屋号を「鍛冶千」と改めた。ちなみに転居以前の家は、新納忠之介氏の旧宅（武蔵野美術大学奈良寮）の隣。当時、雑司町一帯は東大寺関係者が居住する町だったのである。

今在家町に工房を移転してからは、京都から奈良への入口という交通の要衝に立地することから、荷車の車輪作りや修理を始めた。職人の数も数十人を超え、法蓮に薪取山を所有して手広く商いをするようになった。鍛冶千は昭和初期に西田自動車鉄工株式会社と社名を変更し、奈良県で最古の自動車会社となり、現在に至る。平安時代より鍛冶が盛んであったこの地域の歴史を後世に伝えたいとの思いから、平成30年に明治後期の鍛冶工房建物を「珈琲や かじせん」としてオープンした。

明治時代に西洋からもたらされた建築様式が一般にはあまり普及していない時期に、鍛冶千では洋風の小屋組（キングポストラス）を採用する。しかも、トラスの陸梁と敷き桁を鋭角に組み合わせるといった高度な技術を用いている。これは土地柄、腕利きの宮大工がいたから可能だったのであろう。

太平洋戦争中は道路拡張のため曳家されたり、戦後は看板建築に改造されたり、現在は珈琲焙煎所「かじせん」として使用されたりと、この建物はこの町の近・現代の歴史を見続けているのである。



写真:キングポストラス